

都新聞

大正期

復刻版

中日新聞社 監修
A3判上製 [全28回配本]

柏書房

〒113-0033 東京都文京区本郷2-15-13
TEL.03-3830-1891(営業) FAX.03-3830-5337
E-mail: eigyo@kashiwashobo.co.jp
URL: http://www.kashiwashobo.co.jp/



大衆文化・大衆の時代を 映し出した新聞

大正期の『都新聞』は明治期に作られた紙面の性格を發展させ、他紙とは異なる際立った特徴をもつようになります。連載小説はますます充実し、かの長大小説『大菩薩峠』がいよいよスタート(大正二年九月)したのをはじめ、竹久夢二の『自画自作小説・岬』『秘薬紫雪』『風のやうに』、長谷川伸『事実小説・明治曾我』『写真小説・上の山城』『横浜音頭』、吉井勇『恋愛』、小島政次郎『緑の騎士』、伊原青々園『自活する女』など、今日でも多くの関心をもたれている小説が目白押しに登場します。また演劇、芸能、寄席などの記事も増ページにともない多彩となり、芸者の顔写真と紹介記事が増えるなど一段と艶っぽさも加わっています。第一次世界大戦、ロシア革命、米騒動、関東大震災などに揺れた大正時代において、『都新聞』の光彩はいっそう輝きを増したといえるでしょう。文化史、文学史、芸能史、風俗史、社会史、経済史、政治史、メディア史などの研究上、貴重な資料として役立ちます。



◆主な連載小説一覧

作者	題名	連載期間 * ()内は回数	作者	題名	連載期間 * ()内は回数
青木純二	地獄の唄	大正14年3月21日～6月29日(100)	竹山與(竹の島人)	みやこ染	大正6年6月1日～11月20日(170)
秋元巳太郎	終りまで	大正3年2月10日～4月10日(60)	竹山與(松田竹の島人)	玉繩城	大正8年12月18日～大正9年7月14日(205)
生田葵	復活の朝	大正12年10月21日～12月30日(71)	竹山與(松田竹の島人)	黒駒の勝蔵	大正14年4月6日～大正15年12月3日(597)
伊原青々園	大将の家	大正2年3月17日～6月30日(106)	田中総一郎	星霜流転	大正15年5月27日～12月31日(205)
伊原青々園	若狭屋	大正2年12月11日～大正3年3月15日(94)	玉川正人	写真小説・悪戯	大正11年10月11日～12月19日(70)
伊原青々園	役者の妻	大正3年12月6日～大正4年4月6日(120)	運塚麗水	大盃	大正3年4月12日～8月19日(130)
伊原青々園	新椿姫	大正4年9月4日～大正5年1月13日(130)	寺沢琴風	同い年	大正3年7月7日～11月20日(136)
伊原青々園	みゆき物語	大正5年10月9日～大正6年1月14日(95)	寺沢琴風	お葉	大正6年6月6日～10月24日(139)
伊原青々園	人のなげ	大正6年12月22日～大正7年3月24日(123)	寺沢琴風	流るゝ雲	大正8年10月6日～大正9年6月15日(252)
伊原青々園	仮名屋小梅	大正7年12月22日～大正8年5月24日(150)	寺沢琴風	お小夜	大正11年3月17日～10月19日(216)
伊原青々園	花の絵島	大正9年7月15日～12月30日(169)	寺沢琴風	春から夏へ	大正12年5月9日～9月1日(99)
伊原青々園	仇花実花	大正10年4月18日～10月31日(197)	中里介山	大菩薩峠一甲源一刀流の巻	大正2年9月12日～大正3年6月30日(150)
伊原青々園	自活する女	大正11年10月20日～大正12年5月8日(200)	中里介山	大菩薩峠一鈴鹿山の巻	大正3年8月20日～12月5日(108)
伊原青々園	女団長	大正12年10月1日～10月20日(20)	中里介山	大菩薩峠一龍神の巻	大正4年4月7日～7月23日(108)
伊原青々園	老探偵物語・鬼武藤	大正12年12月3日～12月30日(24)	中里介山	浄るり坂	大正5年8月6日～大正6年3月17日(223)
伊原青々園	辻堂伯耆家	大正13年1月1日～6月8日(160)	中里介山	大菩薩峠一問の山の巻	大正6年10月25日～12月30日(67)
伊原青々園	宝を釣る女	大正15年12月4日～昭和2年7月13日(221)	中里介山	大菩薩峠一第五編	大正7年1月1日～大正8年12月17日(715)
江見水蔭	女優の娘	大正9年11月13日～大正10年4月17日(155)	中里介山	大菩薩峠一第六編	大正10年1月1日～10月17日(290)
江見水蔭	紫蜻蛉	大正13年4月10日～9月9日(153)	中村秋湖	塩原多助二代鑑	大正5年1月1日～5月9日(130)
小原柳巷	秘密小説・幽霊屋敷	大正4年5月27日～9月3日(99)	長谷川伸	横浜音頭	大正3年3月16日～7月6日(113)
小原柳巷	秘密小説・將軍の娘	大正5年1月14日～5月27日(133)	長谷川伸	事実小説・明治曾我	大正6年3月18日～6月5日(80)
小原柳巷	秘密小説・悪魔の家	大正6年1月15日～5月30日(136)	長谷川伸	不鳴千鳥(なかぬちどり)	大正9年6月16日～11月12日(150)
北尾亀男	空翔る人	大正10年11月1日～大正11年3月16日(135)	長谷川伸	写真小説・籍なき父	大正11年2月10日～5月5日(85)
北尾亀男	輝く都会	大正13年6月9日～12月7日(182)	長谷川伸	地獄形容	大正14年11月20日～大正15年5月26日
倉富砂郎	青年飛行家	大正2年9月7日～12月10日(95)	浜の里人	写真小説・上の山城	大正11年5月6日～8月8日(96)
倉富砂郎	津和野城	大正5年5月10日～8月5日(88)	半井桃水	最上騒動	大正12年8月19日～大正13年7月9日(296)
倉富砂郎	灘の水	大正8年5月25日～10月5日(130)	東籬庵	伏魔殿	大正10年10月18日～大正11年5月17日(210)
小島政次郎	緑の騎士	大正14年10月21日～大正15年5月11日(202)	藤島一虎	未だ見ぬ父母	大正12年3月28日～8月19日(148)
米光四郎	女相場師	大正2年7月1日～9月11日(73)	藤島一虎	宿命に泣く人々	大正14年6月30日～11月19日(143)
栗村鴨一	写真小説・罪の踊子	大正11年8月9日～10月10日(63)	紅谷璧吉	残されし憂愁	大正13年12月25日～大正14年3月20日(85)
素浪人	淡雪	大正7年3月25日～9月20日(180)	細田源吉	女の烙印	大正15年12月4日～昭和2年6月14日(194)
素浪人	写真小説・梅咲く頃	大正10年12月10日～大正11年2月9日(60)	本田美禪	御洒落狂女	大正11年5月18日～大正12年8月18日(453)
外ヶ浜	浮雲	大正5年5月27日～10月8日(134)	本田美禪	乱れ焼刃	大正13年7月10日～大正14年4月5日(260)
竹内鶴子	ひかん華	大正7年9月21日～12月21日	益田甫	奈落	大正13年12月8日～大正14年5月3日(147)
竹久夢二	自画自作小説・岬	大正12年8月20日～9月1日, 10月1日～12月2日	松菱屋小六	新橋教坊・紅筆日記	大正2年6月4日～7月3日(30)
竹久夢二	秘薬紫雪	大正13年9月10日～10月28日	水月八天	兄弟	大正11年12月20日～大正12年3月24日(94)
竹久夢二	風のやうに	大正13年10月29日～12月24日	南恵三	二人毒婦	大正13年1月1日～4月9日(100)
竹山與(竹の島人)	弘法大治郎	大正2年4月1日～9月6日(158)	山岸荷葉	花元結	大正4年3月22日～5月26日(66)
竹山與(竹の島人)	深草物語	大正3年11月21日～大正4年3月21日(120)	吉井勇	恋愛	大正14年5月4日～10月3日(170)
竹山與(竹の島人)	小桜緋	大正4年7月24日～12月30日(159)	吉井勇	悪霊	大正15年5月12日～12月1日(202)

『都新聞』復刻版 明治期【完結】

1	明治27年	270,000円	11	明治37年	280,000円
2	明治28年	270,000円	12	明治38年	280,000円
3	明治29年	270,000円	13	明治39年	280,000円
4	明治30年	270,000円	14	明治40年	280,000円
5	明治31年	270,000円	15	明治41年	280,000円
6	明治32年	270,000円	16	明治42年	280,000円
7	明治33年	280,000円	17	明治43年	280,000円
8	明治34年	280,000円	18	明治44年	280,000円
9	明治35年	280,000円	19	明治45年・大正元年	280,000円
10	明治36年	280,000円	20	明治補遺版(明治26年以前)	480,000円

※第20回のみ全13巻、その他はそれぞれ全6巻です。

取扱店

『都新聞』復刻版 大正期【完結】

収録年		本体揃	収録年		本体揃
第1回配本	大正2年1月～6月	250,000円	第15回配本	大正9年1月～6月	250,000円
第2回配本	大正2年7月～12月	250,000円	第16回配本	大正9年7月～12月	250,000円
第3回配本	大正3年1月～6月	250,000円	第17回配本	大正10年1月～6月	250,000円
第4回配本	大正3年7月～12月	250,000円	第18回配本	大正10年7月～12月	250,000円
第5回配本	大正4年1月～6月	250,000円	第19回配本	大正11年1月～6月	250,000円
第6回配本	大正4年7月～12月	250,000円	第20回配本	大正11年7月～12月	250,000円
第7回配本	大正5年1月～6月	250,000円	第21回配本	大正12年1月～6月	250,000円
第8回配本	大正5年7月～12月	250,000円	第22回配本	大正12年7月～12月	250,000円
第9回配本	大正6年1月～6月	250,000円	第23回配本	大正13年1月～6月	250,000円
第10回配本	大正6年7月～12月	250,000円	第24回配本	大正13年7月～12月	250,000円
第11回配本	大正7年1月～6月	250,000円	第25回配本	大正14年1月～6月	250,000円
第12回配本	大正7年7月～12月	250,000円	第26回配本	大正14年7月～12月	250,000円
第13回配本	大正8年1月～6月	250,000円	第27回配本	大正15年1月～6月	250,000円
第14回配本	大正8年7月～12月	250,000円	第28回配本	大正15年7月～12月	250,000円

※第1回配本は全5巻、第2回以降は全6巻です。1年分を1～6月、7月～12月の前半・後半に分けて収録しています。

明治期	総計 127巻	本体総計 5,740,000円
大正期	総計 167巻	本体総計 7,000,000円

※価格は本体価格です。

大衆の息遣い、紙面の隅々まであふれる 民衆が育てた民衆の新聞

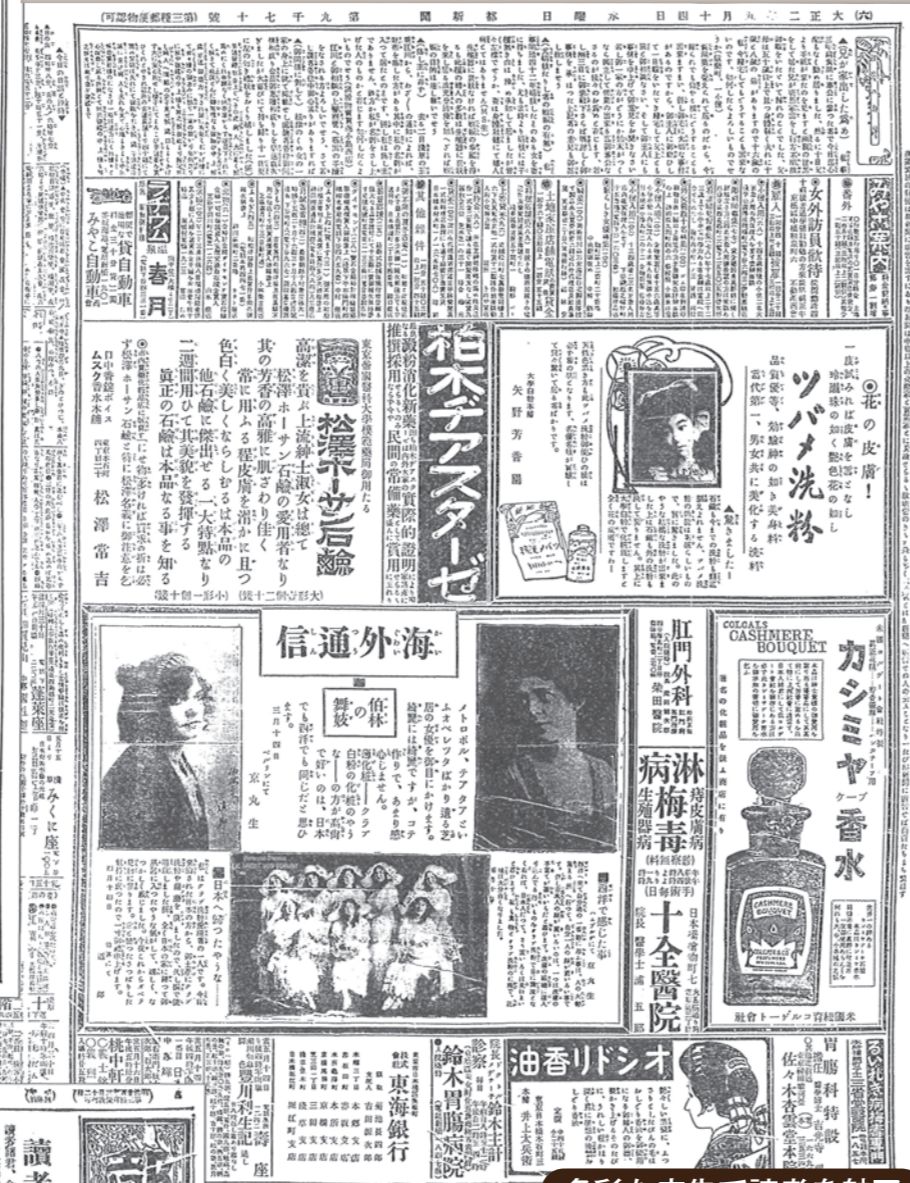
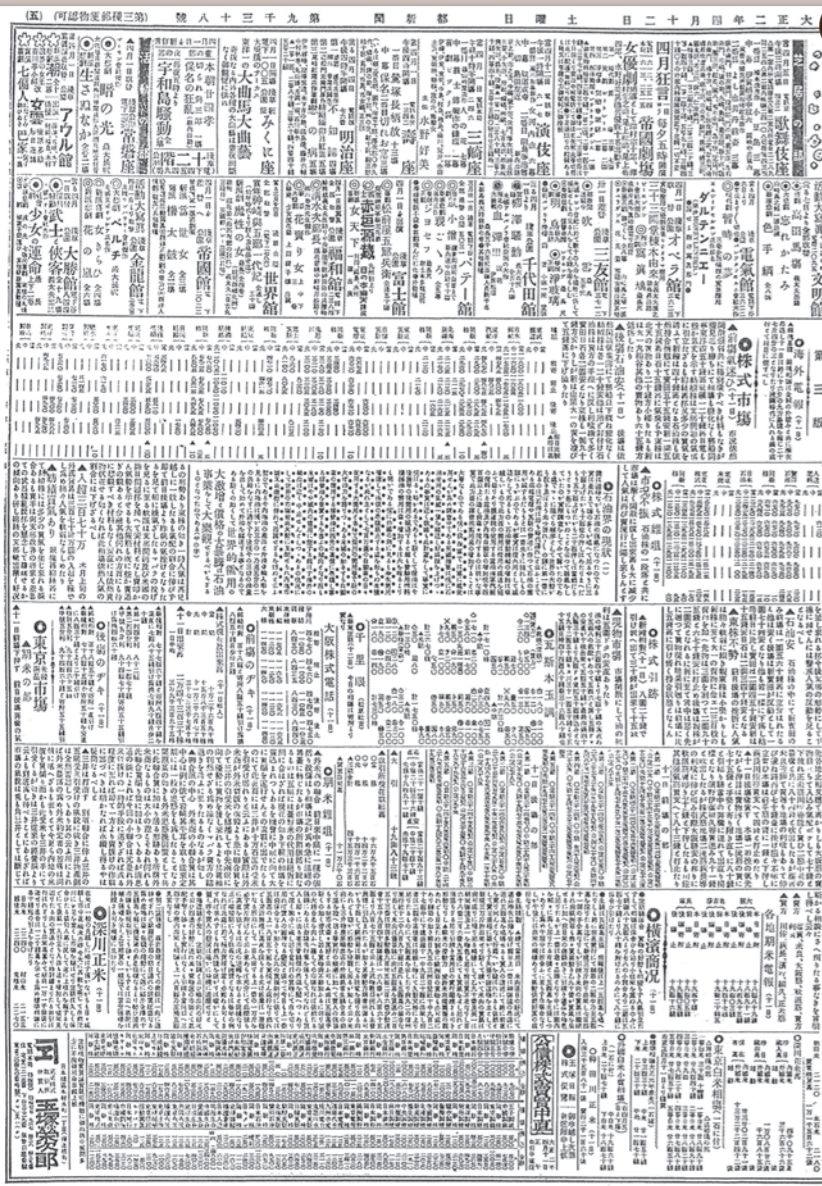
大正期「都新聞」の復刻にあたって

現在の『東京新聞』の前身である『都新聞』は、明治・大正の大衆文化を花開かせた庶民の新聞です。その連載小説は、満天下の人気を博し、黒石涙香、伊原青々園、中里介山など数多くの大衆作家を輩出しました。

また演劇・芸能・花柳界関係の記事は他の追随を許さず、今日の『東京新聞』にその伝統を受け継がれています。さらに「商売人の虎の巻」「実業家の相談相手」を標榜し、株・商況面も充実していました。小社では、既に明治期『都新聞』の復刻を完結しておりますが、明治期の新聞としては、ほかに『郵便報知新聞』(完結)、『東京曙新聞』(完結)、『中外物価新報』(完結)、『中外商業新報』(完結)の復刻を、大正期の新聞としては『都新聞』(完結)と『時事新報』(刊行継続中)の復刻を手掛けております。

充実した経済記事—商況欄

株式、米穀、物価、公債などの詳しい情報が、ぎっしり詰まっている。横浜業界のニュースも充実し、他紙に比べ実際に即した記事が多いというので好評だった。「商売人の虎の巻」「実業家の相談相手」を自負するだけの充実ぶりが窺える。(やの字)の署名のある独特な「場面観」は多くの読者をひきつけた。



多彩な広告で読者を魅了

『都新聞』は演劇界、花柳および化粧品などの広告において独特な長所を発揮していた。とくに、化粧品広告は、俳優、女優などの写真を用い、「化粧法」の記事も豊富で、華やかな工夫がなされている。劇場案内は「芝居の部」と「活動の部」との2部に分けられ、映画常設館(活動小屋)の増加が窺える。この頃の広告は病氣、化粧品関係が突出して多い。今日、新聞広告で大きなウェイトを占める不動産関係広告は見当たらない。正月ともなると、芸者の年賀広告が数頁を埋めつくす。

紙面に横溢する「大正」という時代

『都新聞』は一個の小天地なり世の中の重なる事柄は残らずその紙面に備われり之を読み他の新聞雑誌を読まずとも時世に後るゝ気遣ひなし真に商売人の虎の巻実業家の相談相手殊に編輯に抜目なきは家々の重宝なりというキャッチフレーズが掲げられた『都新聞』の第一面は、呼び物である流行作家の連載小説があり、読みごたえのある頁となっている。また「読者と記者」欄は、投書に記者の意見を添えて掲載するというもので、好感をもって迎えられ、永く続いた。こうした読者との交流も「開かれた新聞」としての『都新聞』の大きな特色を示している。欄外にもさまざまな記事があり、貴重な情報源となっている。本復刻版はこの欄外記事も可能な限り復刻した。



大震災後、復刊一号の紙面

大正12年9月8日、関東大震災から1週間ぶりに8頁建てで、新聞が発行された。第一面の冒頭には「読者諸君に」と題して、哀悼と激励の言葉「万難を排して本日より新聞を発行する」旨を伝えている。主な記事には「帝都大震災記」「全市の惨状視察記」がある。「焼け落ちたその瞬間の浅草十二階」「警視庁先づ猛火の中に」といった震災直後の写真、「負傷者救助さる」「日比谷公園の軍隊発出」などの罹災者の様子や伝言もともに載せられている。また「社員の実施踏査せる東京市内罹災図」、電車の運行状況などは、好評であった。「吉原焼跡見聞録」、劇場や寄席の今後について、芸人の消息など、芸能関係記事の詳しい報道には『都新聞』の特色がよく表れている。

